上台誌舞

雅楽

中国の唐や朝鮮半島から伝来した舞楽・伎楽をもとに発展し、宮中、南都、四天王寺に楽所が置かれた。天王寺楽所は明治初頭に断絶したが、雅亮会が伝統を引き継いだ。聖霊会の舞楽は重要無形民俗文化財。

天王寺区に「伶人町」という地名があるでしょう? 明治初頭まで四天王寺で雅楽を演奏する楽人（伶人）が住んでいたので、そういう名が付いたんですよ。

四天王寺の雅楽は推古天皇二十年（六一二）、百済の味摩之が伝えた伎楽（楽器演奏を伴う無言仮面劇）がもとになっているとされています。『聖徳太子伝暦』によると、聖徳太子が秦河勝の息子や孫に味摩之から伎楽を習うように命じたとあり、それゆえ天王寺楽所の楽人は秦氏の末裔といわれています。

かつて唐や百済からの船は瀬戸内海を通って難波津に到着し、陸路、都のある飛鳥へ向かっていました。当時、四天王寺は外国使節をもてなす迎賓館的な役割もあり、歓迎のために伎楽が披露されていたようです。外国の貴賓は壮大な七堂伽藍で伎楽を堪能し、日本を文化国家だと見直したことでしょう。

前置きが長くなりましたが、「蘇莫者」は、天王寺楽所を代表する雅楽の演目の一つとして、伶人の薗家に代々相伝されてきました。一時廃絶した時期もありましたが、江戸時代に再興され、太子のご命日に行われる聖霊会では必ず舞われています。他の雅楽団体で伝承しているところはなく、四天王寺以外で上演しているのは近年復活させたものです。

聖霊会の雅楽奉納は六時堂前の石舞台で行われます。最初に聖徳太子に扮した横笛の主奏者が舞台の隅に立って独奏します。古来、横笛は太子御作の京不見御笛が使われることになっていましたが、非常に古いものですので、現在は主奏者が自前の横笛を用いています。ただ形式だけは残っていて、役付きの僧がお練り行列の時に京不見御笛の箱を伶人に渡す所作があります。

横笛が奏でられると、音色に誘われるかのように長い白髪と帽子、蓑といういでたちの老猿が現れ、面白可笑しく踊ります。

この蓑一つをとっても意味するところに諸説あり、中には「サマルカンドの雨乞い踊りに由来することを示す」というユニークな説もあります。また「蘇莫者」とは「トルファンの女性用の帽子の意味ではないか」という説もあります。

雅楽のルーツの一つは唐楽にあり、唐楽は胡俗楽とも呼称されるように中国の伝統的な宮廷の音楽舞踊に加えて、シルクロードの芸能の影響も受けています。雅楽の中には、そういった多様な異国文化が息づいているんです。

創建時から四天王寺に伝わる舞

蘇莫者

案内人　天王寺楽所 雅亮会 楽頭　小野功龍

聖霊会舞楽大法要　4月22日午後1時～／四天王寺 六時堂前石舞台

由来

「蘇莫者」

聖徳太子は常々、飛鳥と四天王寺を愛馬・甲斐の黒駒に乗って行き来しておられました。ある時、太子が大和川の亀の瀬と呼ばれる浅瀬を渡られる際、馬上で横笛（洞簫）を吹かれたところ、老猿に姿を変えた信貴山の神が現れ、笛の音に合わせて舞い踊りました。その様子を太子が伶人に命じて作らせたのが「蘇莫者」です。太子ではなく役の行者が大峯山を下る時に笛を吹いたとする伝承もありますが、四天王寺では太子説を伝承しています。また曲中に用いられる八（夜）多羅拍子は、2拍子と3拍子の混合拍子でリズムがとりにくいことから、「やたら」という言葉ができたとされます。

●四天王寺

地下鉄「四天王寺前夕陽ケ丘」下車、徒歩5分。
大阪市天王寺区四天王寺1-11-18
☎06−6771−0066
http://www.shitennoji.or.jp
天王寺楽所　雅亮会
http://www.garyokai.org